山といたし候。高さは三千八百五十七尺余にて、又越の高嶺とも申し候。火山質の山にて登るにもやゝ困難を感じ候、頂上に金北山神社あり、大彦命迦具突智命を合祀いたし、國人の尊崇淺からず候。男子七才に至れば御山詣と稱して登山いたす程に候。承久の昔にや、素朴なる島人院をお誘ひ申し上げ詣でし折、山麓まで行かせ給へるに、金北山樣白馬に跨りてお下あり、院の御前にて平伏せさせ給へり。やんごとなき上つ方とは知りたれども如何程といふ事を知らざりし島人、己が最高の尊崇といたせる神樣がかく遊さるゝに於ては容易ならぬことなりとて、その後いと懇になし奉りたりとの傳說有之候。

阿新丸隱松

「かくれつる蔭はなか〳〵あらはれて名も空高くなれる松哉」日野公の一子阿新丸父の仇本間三郎を切りて逃るゝ途中追手の目を暗ましてれ隱たりといふ陰松は、眞野村阿佛坊の妙宣寺の境外にこれあり候。妙宣寺は弘安元年遠藤左衞門爲盛入道日得上人の開基に候。日蓮上人配流のはじめ獨日得上人保護せられ候

ひしが爲めに咎を蒙り住所をはなれしも、終始かはることなく日蓮上人につくされしとのことに候。今なほ雲に聳ゆる五重の塔は日得上人の志を示すやうに在せられ候。又日野中納言謫居の八年間常にこの寺に寓せられし由にて、其冥福を祈らむがために手寫せられし法華經を寶物として藏するよしに候。(なほ日蓮上人自筆の曼陀羅もありとか申し候)。日野公の墓もこの寺の境内に御座候。

檀風城趾

「秋たけし檀(まゆみ)の梢ふく風に雜田(さはた)の里は紅葉しにけり」守護本間山城守の居城雜田城を檀風城(だんぷうじやう)と申すは日野公のこの歌によるとの事に候。「身を秋の霜に枯れにし檀原けふ來て見ればただ風のこゑ」、實にこの城趾も縣道の傍に隴圃となりて存するのみにて候。日野公のながき恨みを殘して去られたるも、阿新丸の仇を復して本懷をとげたるも皆、この檀風城内のことに候。そのあたりの有樣は謠曲檀風を御覽下され度候。かしこ。

◉鹿兒島より　加賀山　貞

さらぬだにわびしき今日此頃を去月(九月)八日以來病床に起臥する身と相成候てひときは最近過去四年間、此頃の皆樣の御上御なつかしき折柄の御便りうれしく拜見致し候。何か寄稿せよとの御事なるも右の次第にて未だ何するも醫師より許されず候まゝ折角の仰を不本意ながら失禮致すべく御ゆるし下され度候。何しろ筑紫のはてに候へば風俗習慣のみにても隨分めづらしき事ども多くこれあり皆樣に御話申上度候まゝ恢復の上にて御しらせ申上候。乍末時候御いとひ被遊度先はとりあへず御返事迄。かしこ

私病氣は當分靜養すればよろしかるべく御心配下さるまじく候。

◉備中玉島より　田中元惠

御葉書嬉しく頂戴致し候。私よりこそ疾く御禮申述ぶべきを申譯なく候。御忙しき中をそれぞれの御世話厚く御禮申上候。實は私此當地着後道中の勞れか、暑さあたりか、はた又ホームシックとやらか、高熱に下痢さへ加はりて學校も暫く欠勤致しつれづれと獨りこもり居の秋のあはれと申候事も今年初めてしみじみ味ひ申候。其後校長の逝去といふ意外の出來事に殆んど氣抜けいたせし感これあり候ひしが其後は同僚の中二人迄病氣の爲大方二月の欠勤これあり爲めに大多忙を來し只今は一週廿六時間うけけもつ樣の始末とて何れも樣に大御無沙汰と相成しわけあしからず御ゆるし願上候。思へば附屬高女に地歷三時間の爲にギウギウいたしたる昔は結構なるものに候ひき。それはさておき今日は一つ自慢のいたし度事これあり候。そは私受持の生徒六十人と私との間には些の隔てなく彼等の嬉しみ悲しみ何れ皆私の知り得ざるはまづこれなかるべしと申す事に候。當校には生徒日誌とて學科の復習、家事の手傳修養通信等の欄ある帳を持たしめ一週一度、受持の檢査これあり候。私は其修養欄を利用して毎日必ず反省いたさせ微細に記入せしめ申候が

呆るゝ迄よく實行いたしくれ候まゝ何もかもよく相分り候。從づて彼等も心置きなしと相見え代る代る屢々宅を訪問いたし候。此際には私は少しの制裁ぶりたる樣を示さず彼等の自由に談話遊戯せしめ居り候がこれによりて學校内の長短處、生徒間の希望不平生徒間の關係さては土地の人情習慣ごと得る處實に甚大と考へ候。自慢と申候ものは即ち此事に候。かくて忙しき中にも常に愉快なる日々を迎へて樂しう務め居候。つまらぬ事をくどくど長たらしう申上候。まづは右御返事迄。　かしこ

◉春より秋へ

河崎なつ

花見んと寄り來る人に押されつゝさびしやひとり旅に我立つ

上野を立ちしは四月四日午後零時、其の夜の六時、白川にて粉雪に降られ、翌五日午後一時すぎ、大粒の霰の中を田村丸にて津輕海峽を渡る。大粒の霰しぱふる濃き藍の津輕の海をゆく我にふる

まだ知らぬ國の山川描きつゝ棧橋ゆけば霰ぬかうつ

函館にては山皆白く道皆氷りてありき。小樽への汽車の夜

ふとさめて小さき窓よりうかがへば渡島の國は雪にねむれり

見渡せば林も森も野も山も一白の天地、木なく草なく鳥啼かぬ曉、懸崖によりて測れば雪は四五尺も厚かりき。茅屋時に散在すれ共窓さへ埋れて人の住まんとも覺えず、所々に足跡あれど人影だになし。

何程の事もやあると蝦夷の地に來し我なから雪に泣かれぬ

北海道の四月は斯くの如くにして、人は綿入の上に羽織コートを襲ね、ショール手袋は勿論、カクマキといふ毛布大の厚き毛織物を引き被きて街を行き學校にも來る冬なりき。

夜廻りか氷れる街をシャリ〳〵と杖響かせて歩く淋しさ

ひたふるに涙流れて止まらず海鈍色(にびいろ)に粉雪ふる日は

先輩の人に連れられ知らぬ街今日もゆくなり霰ふる街

四月四日

	溫度 午前六時	溫度 最高	溫度 最低	風 風向	風 風速	天氣
東京	六、二	八、五	五七	西南西	三、	快晴
宇都宮	五、五	九、七	三、九	西	四、	快晴
福島	五、九	六、八	三、七	西	七、	曇
青森	四、二	七、八	—	西南西	九、	曇
函館	一、四	六、二	—	—	—	雨
小樽	一、〇	一、〇	〇、一	北	強	雪

○五月にも入りぬれば、雪に交りて、雨、時雨の如く、突如來りて茸屋根を叩き、又忘れたるか如く晴れ渡る。一雨毎に、野の雪、途の雪は消えてゆくなり。物の音靜まりし夕暮、窓の外に堆だかき雪の、シビシビと消えゆくは、寂寥の聲をきくが如し。

癇つよき人にも似たれ北國の雪ふりやがて晴るゝ大空

又しても雨ふる日なりさめさめと狂女か泣ける樣に似てふる

されどかたくりの花、雪の下より先づ咲き出でて、此月の上旬より、北海道の春は動く。其の花の美しさ、蘭に似て且つ淡紫なるを、唯々一花廣やかに柔かき葉蔭に匂ひたるは久しき冬籠の人を何よりも慰むるなり。

柔かき葉に抱かれて春くれば山蔭にさくかたくりの花

北國の雪の下よりみいでたるかたくりの花玉かとぞ思ふ

いと白き莖のよろしさ紫の花のよろしさかたくりの花

○梢の芽三日見ぬまに葉となり花を付くるは、五月の中旬よりにて、櫻さき梅さき水仙雛菊菫花蒲公英冬の花春の花、紅紫こき交せて、所謂百花の爛熳たるはその下旬とす。藤壯丹の艶麗なるは六月に入つてみるべし。霞める山と匂ふ梢とを朝往く途にながめたるは實に駘蕩たる春なれど、夕暮の風胸に染み落日のかげ山原に華やかなるは、秋末の淋しさを免れず。長閑けき春は北海道にみるべからず。